

148
431

狂言堂左交著作

演劇
脚本
八雲立湯津妻櫛

全

演劇本 八雲立湯津妻櫛

場 割



止の巻 出雲簸川大蛇退治の場
青宮洒落須賀祭の場



演劇 八雲立湯津妻櫛

上の巻 出雲簸川大蛇退治の場

役名	長	短
一岩	實は大蛇の化身	一奥女中十六夜
一都	旅人	一同 敷
實は素盞烏尊		一同 櫻木
一稻	田姫	一同 楓
一草	童十津丸	一同 若葉
一奥女中彌生		一同 梅の戸
一同	常磐木	常磐津連中

本舞臺真中二間中足御簾を下したる禰欄間の亭家体向ふ彩色畫の銀襖前側山の張りもの左
右紅白布交の段幕を張り能き所に朱書にて出雲の國簸川と記せま建石の傍示杭平舞臺毛氈
を敷並べ所々に櫻の立樹同じく釣枝管弦にて幕明く「ト爰に奥女中八人紅染鱗の中形揃ひ

の拵らへにて銚子盃を持出て「彌生、コレ、十六夜殿今小影で見て居たら色々の様な物を
常磐木「あじな目遣ひでそつと取らんしたは怪しいぞへへ」十六夜「何で有うと捨て置いて下さ
んせ 敷島「イヤ、不義いたづらは姫君様の大嫌ひ局頭の私等が耳入つたがふしやうじ
や程爰へ出しささんせ若葉「どうでも怪しうムんすぞへ」何の「マア私は男嫌ひじやわいな
ア」皆々「そんなら爰へ」サア皆々「サア」彌生「エ、出まなさんせ皆々「ドレ私等が」ト
書物を取り上げて「皆々「東西」敷「何々上るり名題出雲八重垣つまごめに」○八雲立湯津
の妻櫛○フム何でもコリヤ戀歌と見へる 彌生「ドレお見せ被成升せ」○淨るり太夫「○太夫
皆、どうやら聞た様な名でムんす」○相動升る役人「○○○○○○」○下の巻に至りて惣座中
残らず罷出相動め升る 十「夫を舞臺へ持て出て皆様へ御披露申て呉れと頼まれたのじやわ
いなア 皆々「エ、何の事じやぞいなア 敷「姫君様がしばしおまごるみ遊ばす内花をながめ
て来たがよいと 若、お赦しが出た故爰でお酒盛をせうじやムんせぬか 彌生「どうかよい男
が大勢来てくれれば 皆、よりどりにして樂まうに女中斗りでは曲がない 十「誰ぞ来よかし
よい男 皆々「本に待たる、事じやなア」ト是にてチョンと下手の段幕切て落す常盤津連中
居並らび直に淨るりに成る」 彌生「時ならぬ小春の花に八雲立出雲は餘所の冬枯を神有月の
名に愛て人の心も自から彌生中端と夕櫻「ト向ふより十津丸さら毛の若衆かづら石持のや

つしおちよばからげ草鞋にて草苜籠に酒の壺を入れて春負ひもて花道にて振りに成り「尊」
 の山やさい此山に引や霞のふくさ帯花の香とりて添寐の床の露の柳の乱髪本よはうやれ
 戀じやものこちの色気はまだ若松の野邊の東雲の空夜が明けた黒闇の牛を引出し荷ぐらと
 置て籠にからだを横笛に笛はかもひを口移し謡ひ戯れ来りける「ト振りあつて舞臺へ来
 る」尊「そなたは五郎又殿の子じやないか 尊 どうして爰へおじやつたぞいの 十津丸「今日
 は姫君様が櫻を御遊覧との事こちらが村のテナツチ長者殿が造りた酒は餘所外にかい諸白
 じやと村中へ下された故幸ひ今日のお花見の所で皆さんに上げて呉いといはれた故草苜籠
 へ入れて持て来升たわいなア 十「夫はマア深切な賑かいしい事である 尊「お毒味をしてよ
 い酒なら姫君様へもお進め申たがよいわいの 十津「氣に入らなまだ澤山に貰つてある程
 にツイ往て取つて来升せうわいの 尊「ドレ〜私がお風味をせうわいの 十「又まんが
 ちなマアお局へ上げたがよいわいなア「ト籠の内より壺を出し柄杓にて吸み彌生についで
 やる彌生呑み」尊「チ、甘露〜 尊「ドレ私にも〇チヤ〜私は始めて此様なかいしいさ
 をたべ升たわいの 尊「此上の願ひには何ぞよいお香があつたらよからうなア 十「香がなう
 て味うないちやつといつもの様な隔なりと 十津「どうしてマア曠のお座敷で 尊「夫を私
 等が所望じや〜」ト御簾の内にて」 岩長姫「身のうさを遠山櫻うつろひて夕日の川にもゆ

る思ひは 尊「ソレ姫君様の御目覺 十「靜にさしやんせいさア「ト御簾を上げる毛氈褥をし
 き岩長姫廣振袖襦袢の拵らへにて脇息により傍に硯短冊をのせし時書の本を直しあり」尊「
 思ふ事胸にたへねば花詠めても心にそまらず又寐もやらぬ淺間しさ推量してたもひのう 尊「
 お道理様でムり升 若「酒は愁の玉葎殊更此者が姫君様へ献上の諸白 尊「夫は〜かいしい
 九献 尊「私共がお毒味を致し升た所 尊「伊丹池田灘中國にも並ひあいな名酒でムり升 尊「お
 一つお過でし 尊「遊ばされ升せう 尊「様子は是にて最前より 尊「左様なればドレお酌を
 「ト銚子へ酒をうつし岩長姫へつ〜」 尊「サア〜お姫様のお香に 尊「是非ともうなた面白
 う 尊「所望じや〜」 十津「イエ〜珍らしいもない田舎歸り〇チ、只今道で都の旅人二
 人連れ此所の櫻を見物に参つたと申升る故今日は姫君の御遊覧櫻の元へ行れぬといふたれ
 をア、渡し場で足やすめ都人なれば定めて舞も秀句もまた格別でムり升せう姫君様のお慰
 みに 尊「本にろりやよう心が付た 尊「いつはならずと今日一日は 尊「せめて男の傍へなど
 尊「若「引ッ附いて見たいわいなア 尊「ア、是はしたり都の咄しも聞まはしくい思へ共妾はが
 祈るは此日の本の神に非ず遠つ佛に大願の爲邪淫を犯さば忽ちに此身の破滅殊に海山隔て
 たる此山里へ来るも不思議 尊「ろりやよう心得て居り升る只面白都の咄を聞くと思ひせ
 十「不意に掛つて私共が 尊「ソレ十津丸早う其旅人を 十津「畏り升た 尊「木の間の方へ打向

「ト花道の付際へ行き」^{十津}「ノウ」夫にまします都人お救しの出たればとく花の元へ
 お入り候へテ、イ、呼れて爰へ出雲路の渡りに船の底はかと花を尋ねて妹脊より
 とさし金の鶴鶴二羽花道よき所に舞ふ是を追ふて向ふ稲田姫廣振袖着流し好の拵らへに
 て振張の市女笠を持ち鳥を押へやうとするこなしにて」^淨「翅かはして隠れつ見へつ跡を
 暮ふて友鳥の「ト跡より旅人若衆のつら壺折様に仕立し道行服劔造りの一本さし好みの拵
 らへにて出て来り」^淨「暫し忘る、旅のうさつらや今宵の舍りさへ定めも泣を慰めて○我
 が父母の二柱思ひぞ天の浮橋に戀を教へし妹と春の小鳥をしほに歩み来る「ト小鳥は木の
 間へ隠れる」^{稲田姫}「美しくしい其小鳥が 旅人、チ、とつちへやら飛んで往たわいのう 彌、イ
 ヤ、其小鳥より美くしい都人 帶、最前から姫君様のお待兼 十津、サア、爰へムつて餘
 所のない神有月の花盛りとつくり詠めて行つしやれ 旅、是はマア思ひもかけないやとどな
 き御方の御前とも存じ升せず 稲田姫、花に浮れて身の程も辨へず恐れ多い此席へ 敷、イヤ
 常は格別今日は花見の御遊興 十、都の咄しをお聞被成たいとの仰せ故 櫻、是へ女夫の
 そなた衆を呼び迎へたのじやわいなア 彌、イ、エ私共は 旅、此者の實の兄でムり升る 岩、
 ろんな女夫と思ひの外兄弟かや 旅、左様にムり升る 彌、お恥かし乍ら私共は妹脊の縁の薄
 き故 十、ア、ろこで此出雲の國の神々へ御願籠にムつたのかりやモウ此國は縁結びの本

家本元 彌、よう願ふて根の強いよい男を持つ様に 彌、信心したかよいわいのう 十津、コレ
 旅のお人都の咄しを早う仕たがよいわいのう 敷、都女郎の戀咄しが所望じやく、旅、
 是は又迷惑 皆々、サア、早く 旅、さらばお咄し申さうう「ト扇を持立掛る」^淨「九重の都
 の春は猶更に花見車の御簾の暇垣間見初めて思ひ初め名宛も長い玉章に此花咲屋姫様へこ
 がる、君の縁の糸結んだ縁の端殿を忍び入るさの月隠れ「ト奥女中兩人花の枝を持って打て
 掛る」^淨「よるのかどいに引寄せて姫の御手をにぎく」のじつとしめたる御言のり○机帳
 を裾に掛巻も色に畏き戀中と申斗りはなかりけり「ト奥女中皆々掛つて宜敷所作立模様納
 る岩長姫旅人に見とれ大盃を取つて件の酒を呑み干しこなし」 十、ろんなら今の戀咄は咲
 屋姫様と我君の馴染の咄しかいのう 岩、自らが戀慕ひし彼の君には現在妹の咲屋姫をフム
 旅、ろんならあなたは 彌、大山すみの 岩、アイヤ國隔れば知る様はなけれど其咲屋姫に男
 を寐とられし姉あらば賑やくやしう○ホ、ハ、掛搦ひのない都の噂 敷、コレ、そちの
 お人其節の戀咄しは取置て 十、夫々京洛中の町の生娘 彌、又は墨染五條坂 帶、江口神崎嶋
 原の 若、意氣地の咄しが 皆々聞たい 旅、夫なれば私共も少しは心得て居り升る 十津、姫
 君様のお氣の浮くやう 彌、ろんなら爰で私から 彌、川竹のこりと意氣地と浮氣をのけて眞
 實心は愚痴になり今宵首尾して又いつか来るや曲輪の疊算幾夜逢とねばツイ其儘に爰も乱

して置巨燧○更けて廊下の足音は若しや主かと起直り○アレ又それでも泣寐入りこがれく
 てたまさかに来てこしらしてくどく口舌するのは勤の習ひ私しや年明け人さんに夫婦喧
 嘩といはれたら夫が嬉しい身の願ひ機嫌直して下さんせと頼るを拂らひ突き退けて「ト稻
 田姫旅人を相手に宜敷有てト、振り拂ひ入り替り」淨「三味線取て爪弾に○すかぬ客には
 逢ふ身ぞつらい色にや苦患をすくひばち心てんじで裏茶屋へ呼び糸掛けて忍び駒○アレ又
 ろんを胴慾な緒口せまき女氣に○泣ておどしてかせかけて裏皮知れぬ空涙とんだ八ッ地と
 高調子手當り任せ鏡臺の鏡を取つて投付ればあたり八間びか／＼く／＼わらく／＼くどつ
 さりそりや雷じや隣をかへて桑原／＼と駈出す遣り手に氣がついた襦を取り上げおばい
 は留守か虫の禿かこちやおよばねや輪の敷取り一イニウ三イ四向ふ座敷は醫者ではないか
 醫者は醫者でも薬は持たぬ○何のう薬師あかぞか寺の坊さん簪よ買に來た一夜さ戀にもつ
 れ合ひ機嫌直して中直り○是も曲輪のわさくれや「ト旅人能き程に十津丸を立せ八人の奥
 女中をあしらひ面白き振り色々有てかかしの振り宜敷納る此内に岩長姫醉のだん／＼廻
 りしこなし」十「テモマア氣さくな旅の人 岩、妾はもどうぞ相手に成て 楓、ア、申あなた
 は異國の御佛へ誓ひを立て男の傍へは 岩、本によう心付てたもつた去りながら心醉はねば
 何の厭ひはないわいなア○そもじは妾はが妹君をなたは思ふ戀人に假令爰で語るにも 十」

責てはうさを 岩、忘れ草「ト岩長姫立て」 岩、目見得始めは 岩、チ、夫よ、淨、頃は水無月
 佐保川の物思とする盛狩君のお姿餘所乍ら見上げて鬱々と夢に逢瀬を楽しみにあこがれて
 居ても情なや人していはんよすがさへ泣て身で身をはしたために聞けば妹と戀草の茂る御縁
 もあるならば責て一夜は自が思ひを晴らし玉はれと千束の糸も其儘に返す／＼もエ、恨め
 しの咲屋姫をつかしの戀人と口説つ泣つ附纏ひ無量の酒に物思も何時か乱れて身を忘れ「
 ト岩長姫旅人稻田姫を両方に双身のもやうト、薄どろ／＼入り妻さふり宜敷」淨「數掛み
 かのす盃にうつる大蛇が嫉妬の形相「ト岩長姫稻田姫の方へ急度見込ひ旅人盃を見込み」
 岩、其希人を取り持て 稻、エ、モ、現在主ある我夫マを 數、扱はそなたは女夫よな 岩、エ、
 ○イヤ全く 岩、何であらうとソレ女子共 岩、心得升た 淨、情け用捨もあらばころ見かは
 す夫は引分られ妻にも心奥深き木影へ隔つ附き／＼が取持つ姫の新枕嬉しき夢や結ぶらん
 「ト此内奥女中四人稻田姫を引立て上手の幕の内へ這入る十津丸支へるを奥女中四人隔て
 る岩長姫は旅人を家体の内へ伴ひ旅人こなま有て岩長姫へ寄添ふ此見得宜敷御座をかるす
 十津丸急度成り」十津「混沌未分の昔より國土を守護の身なりしを岩長姫に奪取られ都へ入
 る事ならざりしが智仁勇備の素盞鳥の尊の爲に安々と都へ戻るかアヲ嬉しや悦ばしやなア
 者、ヤ、扱、汝は山賊の牛追ふわらべと思ひの外 櫻、其俗姓は 四人「何者なるぞ 十津、我こ

「是は國の寶の左りに立尊き御劍の精なるは 四人扱をよきア 十津」
 蛇形に等き蛇形の汝等
 神の應護に及ばんや 四人其舌の根を 十津何を小積な 昔一度に打込ひ櫻のしもと請つ
 流しつ銘劍の威徳に何かはたまるべき落花微塵ひらくく光りに委瑞穂の國神の威徳を
 「ト四人を相手に宜敷立廻りにてさきとひ三重に成り十津丸真中に立四人取巻を見得宜敷本
 舞臺真中にてせり下ろす正面の御簾を切て落し欄間引上げ左右の段幕切てかとし山の張物
 打返し箱押の岩角に成る返し

本舞臺以前の二重の上皮附丸太に高棚をつき四方に粧ひ竹を立注進を張り荒鷲の上へ棺を
 直し上下杉林立木向ふ一面黒幕切て落すと黒雲の書割灯入りにして稻妻の仕掛け生贄の棺
 据へてあり生贄の小家の前所々に小壺をいけ並べ舞臺前に通しの立波よき所に符を焚き日
 覆より松の釣枝總て出雲鏡川の体大どろくにて道具納る「ト鳴物打上げ下座の大薩摩に
 成り」大薩摩「夫天津神代の古へや甚直野讓習はせて美なる少女の人身御供見るもいふせき
 鏡の川や〇既に時刻も丑滿の天をこがせる符りの煙り谷深うして峯聳へ八つのもたへに毒
 酒をたへ影を浮める高棚に贄のひつぎを据へたるは恐ろしくも又物凄し「ト大どろく
 を冠せし鳴物に成り岩長姫鱗の脱掛け朽葉色の長袴に鬼女のかづらへ角を生じ壺より酒を
 汲上げて酔乱れしこなし詠への鎮杖を持ち目覺しき体にてせり上げる研入り詠への合方」

「岩」ハテ心得ぬ贄に取添へ供へたる酒の酔に犯されてまどろみしが〇扱は今のは夢なりし
 か〇ア、嬉しや今の邪淫が誠なりせば此身の破滅〇我も異國の羅刹に生立何卒して此國を
 魔界になさんと押渡り大山すみか娘と生れ都へ近寄り仇なして本望遂んと思ひしを見顯て
 されて立退く折り計らす手に入る寶の劍是をひとり姿を變へ此國を覆へさん門出を祝す
 今宵の生贄ナ、さうじや「ト是より常盤津を出し」常盤津、魔界自在の術あれど流石心は畜
 類の壺にうつれる棺の影香干しく息をつき足もしどろに浮れ立つ「トよるめさく宜し
 く振りあつて」常盤津とすれを吹上げて又も嵐に焚く籬り鏡の川上に年を経て澄み濁り
 は濃き薄き酒にもまる、九十九髪乱れ心は何故ぞ〇我寶劍に心を掛け岩長姫とは生れしが
 蛇道の縁は切れやらす悪女と生れ憎まれし〇美女は此身のほむらの種美目よき女を取り盡
 さん「ト宜しく凄味の振りにて上手へ廻り岩臺をつたひ高棚へ上り」岩是こそ今宵の我生
 贄「淨」杖を振り上げてうと打ては棺は碎けてばらくく稲田姫は消へ入る思ひ「ト岩長
 姫棺を打仕掛にて棺碎け内に稲田姫白の振袖緋の袴巻物に記したる祝詞を讀誦ふるへ居る
 大どろく生け殺し大小入り」常盤疑ひ嫉むは蛇道の常瓶にうつらふかつらめの姿は一つ影
 は二つ三つ四つ五つ六つ七つ八つまたの心とりく「トイデや看に一呑と姫を宙宇に引上げ
 ればこなたはのつとを差附ける神力應護に敵すべき五躰すくんでたぢくく〇又附け

ひ鱗を鳴らしはむらを吹かけ飛かれば身を沈んでさつと開きためらふ虚空を窺つて鐵杖振り上げ打落し既にうよと見へたる所へ「ト奥女中八人脱ぎかけに成り生笹の持枝を持ち稲田姫を取り巻く岩長姫邊りを見廻し前なる壺へ影のうつるを伺ひこなしあつてト稲田を引寄せる稲田伴の祝詞を差附る是にて岩長姫八人もたちくと成る又岩長姫稲田の誓をとつて平舞臺へかり立廻り宜しく鐵杖にて祝詞を打落し直に稲田姫へかゝる稲田姫遁れて花道へかゝる旅人素盞鳥の姿にて劍をかい込み逸散に出て來り急度見得」岩「ヤア邪魔立ひろがば汝も傍杖さりとく姫を渡しからう 旅人「ヤアござかしき其一言我ころは天地開け初めてより兼て音にも聞つらん日本無双のわんぱく者手並の程を試みよエ、岩「何を」ト押戻し三人引臺にて舞臺へ來り」岩「又打かける鐵杖を受つ流しつ尾先を踏しめ立塞りト一寸立廻りて稲田姫を囲い急度成る日覆より錫紙張りの雨をくり出す雷の音向ふ所々稲妻の仕るけ」岩「猶も怒りの角振り立大蛇を蹴立追詰め追巡り○寶劍出だせ姫渡せといひみ争ひ戦ひしが尊の勇力勝りけん大蛇をしつゝと抱きしめ尾先をてうと切り落せば顯はれ出たる國の御劔 是こそ尊の尋ね給ふ國の御劔 岩「夫渡しては 旅「何を○チエ、忝い」勇力和光の勢ひに弱る所をさうと投げ國の御寶揃ふなる神の威徳を著るき勇ましかりける「ト大どろく烈しき鳴物岩長姫旅人稲田姫の姿を畫がさし大行燈の前側を上よりあをり

おろして隠し又日覆へ引上げる

下の巻 宵宮洒落須賀祭の場

役名

一世	話 役 壽 三 郎	一娘	子 お つ る
一手	古 舞 お こ ま	一藝	者 お と く
一同	お と も	一曙	や お や ま
一若	い 衆 幸 藏	常 盤	津 連 中
一同	桂 子	長 唄	離 子 連 中
一同	猿 之 助		

本舞臺正面へ上手に右の八股の大蛇退治素盞鳥尊稲田姫の大行燈直ぐに灯りを點じ此左右へ杉の折枝是へ赤塗りの小提灯大分釣り是も灯入り上の方町木戸の見切り宮元の町續き漏斗の遠見町跨ぎの提灯の書割都て灯入りよて宜しく納る「ト常盤津の前彈あつて跡の淨るりの掛りより猿之助幸藏桂子何れも帷子大稿又は染模様着流しつまみからげ白足袋麻裏草履帶上べしさき緋縮緬又は絞り類の脱ぎかけ祭りの扇子を名々持ち揃ひの手拭此三人の内へ灯入り万燈を振りの内手送りにかたげる仕組次へかつる銀杏番やの字の結び脱ぎかけ揃

ひ手拭柄の長き御幣をかたげおとく藝者片肌脱ぎかけおつると共に紅絹緒の草履御神酒箱を揃ひ手拭にて花の枝へ附けしをかたげ手振りの手順にて次第にかゝはらす出来る」
 来ても見よかし氣も勇ましき家体雌子の音に連立てヤレコレ今度の神勇め捧げ万燈見て暗らやぬさ御幣を振り立て是ら氏子に障りなく所繁昌ヨチイ〜えんやらやアエ、○木遣り獅子頭ら牡丹おしやくは姉さんごかしやれコレこれにはサア四神の銚に先掛けて渡る神も酒の氣がなけりやはづまぬ何でもかんでもかぬねむしよヤンレエ、ひら〜御神酒に勇み連立ち來りける「ト前のト書の如く花道より舞臺へ掛り振りあつて納る」
 猿之助、おとくさんおつる坊も 男三人「御苦勞〜」
 幸藏、あしたは彌お神興を氏子中の町々へ 猿渡すと相談が極るに附て 桂子「どこでもろころでもいしふしなく 猿渡りが附た悦びよ 幸會所で御神酒開き 桂男斗りじや極まりが悪いと ところ夫も私しや此おつるさんと おつる會所の前を通つた時 兩人「呼上げられてお仲間へ〜」夫はさうと聞取りで役に當つた つる姉さん達が 藝、チ、肝心のおこまさんや 幸、大姉の手古舞連中 桂、モウ爰へ來さうなもんだ ところ其二人もアレ〜向ふへ 男三人、早く呼ぶがい、 皆、チ、イ〜 淨、呼ばれ招かれ世渡りの新駒下駄でお座敷へ口が掛つて出立も揃ふ別所に玉揃ひ「トおこま藝者嶋田鬘手古舞の拵へ着附肌脱ぎ立附揃ひの手拭祭扇を持次におとも藝者手古舞の拵へ鉄棒祭扇揃ひ手拭にて出て來る文句前へついで」
 「玉や〜 幸三郎「サア評判の玉揃ひ玉や〜」
 文句の邪魔か蛇の目傘早替り○ハッハ通り板返しヒヨコ〜のひよつくり俵○お膳の上でも箸箱でもお子様のお慰み「ト此内壽三郎御興の先立世話番の拵へ稿物の着附襦からげ帷子の拵へ御興擔ぎの麻の禪へ色々な持遊びをぶらさげ是へ板返しのひよくり〜の俵ら蛇の目傘杯が附えを手に持祭の商人のまなびをして三人の女形へ交る仕組なり 淨、海はうづきやはうづき丹波はうづき方々の棧敷當込む商法も○世話人がへの役徳に「ト此内神興臺は鳴物あしらひおこまおとも壽三郎宜しく」
 幸、チ、世話番大姉イ、 藝、お駒さんにおともさん 桂、待兼山〜 ところ待兼るといへば ぶま、曙のおやまさんがまだ爰へ 淨、違へねへおれが通りかゝつた時 ところ跡へ遅れ成さんしたか ところアレおつるさんと連立てムんすわいなア 皆、チ、イ〜 淨、又呼ばるゝ取り成りも酒にはるめく夕映や○けふお祭りの人撰は仙人の名を逆様に高くとまつたもがりの鳥○大姉イぶるとがもない姉御頭らの手古舞で厄介者の鉄棒も○いつか身儘に形り振りも○親分さんの御世話にて渡りも附けて夫からは斯るたばねの亭主持引すりの名は取り消しに○稼ぎ男にくり女房○長い月日の其内にひよつと浮氣のあつた時かうした譯と新聞の夫婦喧嘩といはれたら嬉しからうじやないかいな「トおこま女形三人おつるをからみ壽三郎中へからみ猿之助幸藏桂子を女形の内よ

●十八
幸藏桂子つりこまれ宜しく「静」しゆるもさるに○譚もなや やまとも「サア是からは氣をかへて」ト酒道具持出し「静」あいのおまへのお手元杯と○野暮ちよ斗りいはうよりいつそ野暮なら野暮らしく○三ッ打て追つ駈るよしくくくくよんやサ○面白や○櫓目出度と神勇め万々歳とぞ祝まける △先づ今日は是ぎり「ト目出度打出し」

脚本 八雲立湯津妻櫛 終

明治廿七年十二月六日印刷
明治廿七年十二月十二日發行

(定價金三錢)

版 及 行 所
權 興 有 權

不 許 謄 寫

東京市深川區富岡門前町廿六番地
著作者狂言堂左交事故 櫻田治助相續人

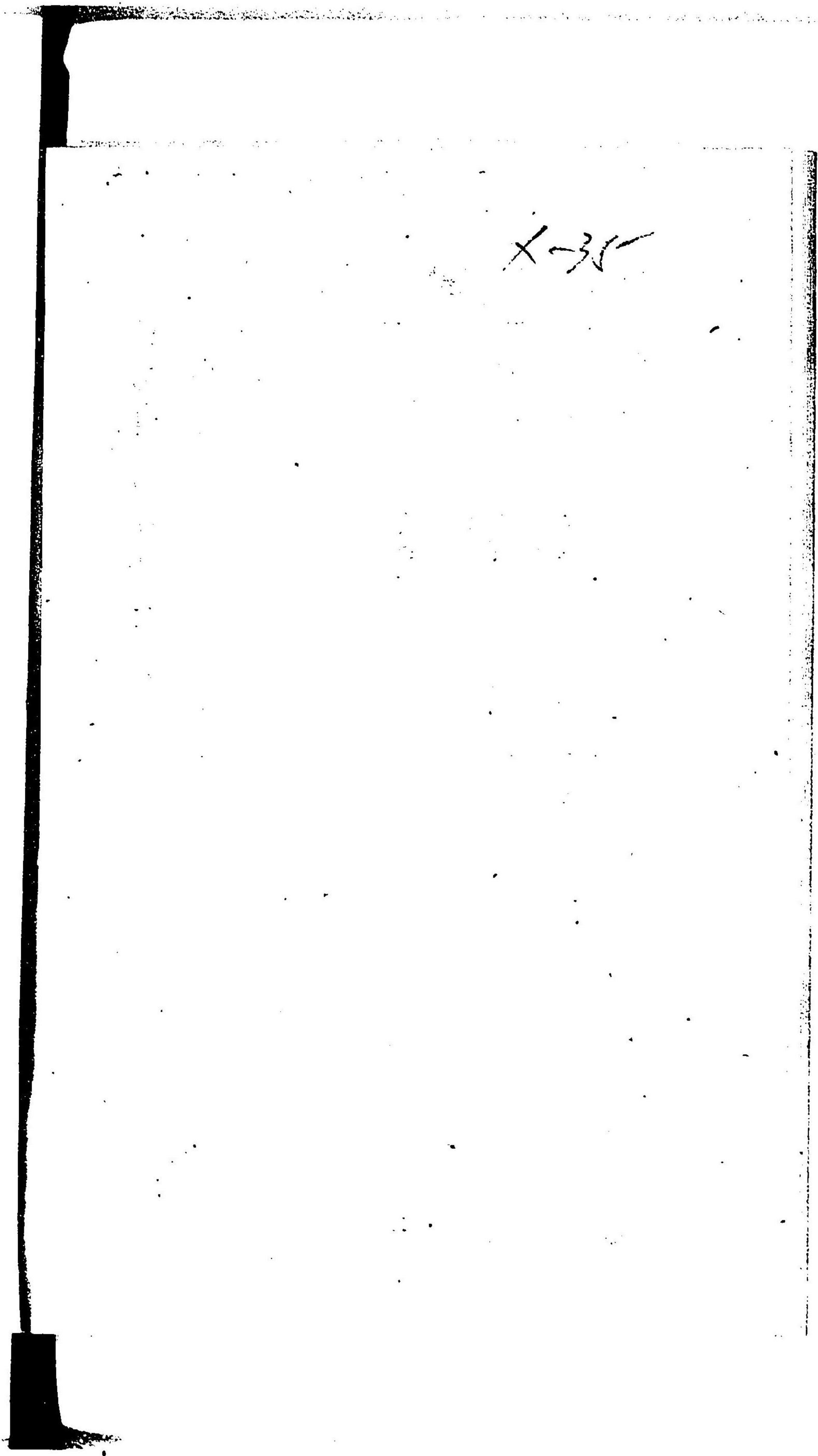
中 村 夕 三

大阪市東區備後町四丁目四十番屋敷

中 西 貞 行

大阪市東區内本町橋詰町六十八番屋敷
周擴社

印刷者 前田菊松



X-35

146
463

088789-000-2

特52-574

八雲立湯津妻櫛

桜田 治助 / 著

M27

DBJ-0448

